

長谷川 望牧師

* 主イエスが神の子キリストであるしるしとして多くの奇跡を目の前で行われたのに、多くの人が信じなかった。それは主が預言によって信じなくされていたからである、と使徒ヨハネは言う。「主は彼らの目を見えないようにされた。また、彼らの心を頑なにされた。彼らがその目で見ることも、心で理解することも、立ち返ることもないように。そして、わたしが彼らを癒やすこともないように。イザヤがこう言ったのは、イエスの栄光を見たからであり、イエスについて語ったのである。」(ヨハネ12:40~41) イザヤ書53章は「主のしもべ」として知られるイエス・キリストの十字架を示しているが、それも誰も信じない。ヨハネは福音書においてユダヤ人たちの「不信仰」をたびたび書いてきた。彼らは自分たちこそ「信仰者」であると思っていた。しかし、彼らの「信仰」は律法を守ることであり、聖書全体からメシアを待ち望む信仰ではなかったのである。まことのメシアであるキリストが現れても、信じることができず、かえってイエスに敵対し、十字架につけるまでになってしまった。しかし、それは神の深遠な計画の中に組み込まれていたことであった。

* 「しかし、それにもかかわらず、議員たちの中にもイエスを信じた者が多くいた。ただ、会堂から追放されないように、パリサイ人たちの気にして、告白しなかった。彼らは、神からの榮譽よりも、人からの榮譽を愛したのである。」(ヨハネ12:42~43) 「議員」は社会的にも最高峰の指導者層で、影響力も大きかった。政治と宗教が密接に結びついていた中で、ユダヤ教を離れてイエスを信じることは地位がおびやかされることであった。しかし、夜こっそりとイエスに会いに行き、自らイエスを埋葬したニコデモや、自分のために用意していた墓にイエスを埋葬したアリマタヤのヨセフなど、勇気をもって見える形でイエスへの信仰をあらわした者がいた。一方、信じていても、告白しなかった者が大勢いたという。もし、告白すれば、「会堂から追放される」、すなわち、ユダヤの仲間から外されてしまう恐れがあったからである。私たちも人の目や権威のある当局の目を気にして、信仰をあらわすことができないということがないようにしたい。終わりの日には神からの榮譽を受け、義の栄冠をいただけるよう、信仰のレースを走り通したい。